

## 長野県白馬高等学校

副校長 吉野 雅史  
総括教諭 野秋 貴浩

### 1 はじめに

訪問先の長野県白馬高等学校は全国募集を行っており、寮や公営塾など村の協力のもと学校運営を行っている。また、本校と同じく「地域魅力化型」にも指定されており、学習面においても地域と協働し、地域の特徴を活かした授業を展開している。

### 2 長野県白馬高等学校の概要



長野県白馬高等学校は昭和23年5月に長野県大町北高等学校定時制分校として設置認可され、昭和26年4月1日より長野県白馬高等学校（設置者：長野県白馬高等学校組合）として開校した。平成26年には「長野県高等学校再編基準」に該当し、白馬、小谷両村が県教委へ「白馬高校の経営、運営に参加する地域案」を提出した。翌年より「国際観光科」の設置が決定、長野県、県教委、白馬村、小谷村とで「白馬高校に関する連携協定」が調印された。平成28年4月1日に新たに全国から生徒を募集する国際観光科（生徒定員40名）が開科され、普通科（生徒定員40名）と合わせて2科体制となった。現在では、タイ国20校と学校間連携協定書を締結し、デュアル実習、高校生ホテル実習等地域の特色を活かした授業を展開している。

### 3 長野県白馬高等学校の教育課程

白馬高校の特色教育として「観光教育」「環境教育」「異文化理解教育」「山岳教育」「社会体験/地域協働」が行われている。観光教育では地元ホテルやカフェレストラン等と協力して、「高校生ホテル」「高校生レストラン」「ツアー実習」等課外活動を中心として行っている。環境教育では、環境Ⅰ、環境Ⅱの授業として地域環

境の調査研究等を主に行っている。異文化理解教育では、海外からの移住者、旅行者との関わりやブリティッシュスクールイン東京との学校間交流を行っている。カリキュラムの中で、生徒が積極的に学校外で活動する時間を設けているのが特徴的である。

また、高校生ホテルやデュアル実習など、企業の一員として責任のある中で実習が行われており、主体的・能動的な「おもてなし精神」を実践の中で学んでいる。

### 4 公営塾「しろま学舎」、寮生活ほかについて

学校と連携した学習指導体制の中で、村が運営する公営塾を敷地内に設置している。この学びの延長で、信州大学と村が提携しプロジェクト学習を実施している。主に活動している生徒は10名。生徒企画で世界統一行動日に気候変動マーチへの参加を呼びかけ、実践したり（120名参加）白馬SDGsラボの運営や村長への政策提言など、地域と密接に関わった主体的・能動的な活動が行われている。



また、白馬村、小谷村が主となり、グローバル講演会『本物に触れる機会を』生徒へ提供している。講師として岡田武史元サッカー日本代表監督やパタゴニア日本支社長、元宇宙飛行士山崎直子氏など、一線で活躍している講師陣が生徒の活動を支援している。依頼や謝金等調整は全て行政側が行っている。

寮の運営は白馬村、小谷村両村が行っており、3食光熱費込みで生徒負担は月額50,000円。現在は70名程が入寮し学校生活を行っている。また、舎監とハウスマ

スターが常駐し生徒の対応をしている。

#### 5 白馬山麓事務組合について

白馬山麓事務組合は白馬村長を管理者として組織され、白馬高校支援係が高校の運営を支えている。公営塾の運営や寮の運営、全国募集に関わる費用や講演会、プロジェクト学習における支援など、学校の根幹を支える活動を白馬村、小谷村両村からなる白馬山麓事務組合が担っている。なお、年間予算は約2億円。白馬高校は行政側の熱い思いが学校を支えているという、強い印象を今回の視察では感じた。



宮崎県立飯野高等学校

総括教諭 山口 正夫  
 教諭 鈴木竜太郎  
 教諭 瀬戸 淳一

1 はじめに

宮崎県立飯野高等学校が開催した「グローバルリーダーズ サミット in 飯野高校」を3日に渡って視察した。1日目は「グローバルリーダー学習発表会」として飯野高校での実践が発表され、2日目に参加各校の事例発表や、ゲストによる講演会などが行われた。3日目には参加校やえびの市市民、参加校教員が同じテーブルについて意見交換会が行われた。なお、今回のグローバルリーダーズサミットは、飯野高校の生徒が発案・運営したという。

2 飯野高等学校の探究への取組について

同高は、数年前までは統廃合がささやかれ続けたものの、地域との連携活動などによって小規模校ながらも独自の地位を占める高校になった。また、1つの学年には普通科2クラス（総合コース1クラス、探究コース1クラス）、生活文化科1クラスが展開されているという。探究活動では、ポスターセッションなどにとどまらず、実践型の探究活動を展開していることが大きな特徴である。なお、1日目の発表会は地元中学生（同校は、地元の小中校との連携を進めている）や他の参加校、来賓等を交えて行われた。

普通科（探究コース）では、生徒自らが身の回りや地域の課題を見つけ、その解決に向けて研究、実践していく活動を展開している。たとえば、国際交流に関する探究、地域の鉄道について、子育て支援についてなどの探究などの発表を聞くことができた。

印象に残った取組の一つを取り上げる。たとえば、子育て支援プロジェクト。虐待のニュースを聞き、虐待の背景を調べたうえで、育児に対する支援の必要性を痛感したのが背景にあったとのこと。アンケートや市役所で話を聞くなどして調査を進め、虐待の原因を育児ストレスと捉えて精神的ストレスのケアなどに焦点を絞った活動を展開した。具体的にはNOGIKUというイベントを展開し、イベント会場で母親にはアロママッサージなどを行いストレスの発散を行う一方、高校生がその間、子供の面倒を見るなどするというもの。すでに3回程度開催

し、よい評判得ているという。この高校生は産婦人科の医師の講演会への参加や、子育て支援センターへの訪問などを通じて理解を深めたりしているという。

どの活動も動機が明確になっているほか、それら生徒なりにしっかりと調査を行って実態を把握したうえで考察が進められており、課題解決に向けたアイデアやアイデアの実現に向けた高い行動力を発揮していた点が印象的であった。また、先述した通り、なぜこの活動を行う必要があったのか、動機の部分も含めて論理的で説得力のある発表となっており、実際の活動だけでなく、発表そのものもよく練られたものとなっていた。

3 自治体との連携について

えびの市が飯野高校に対する支援事業を展開しており、各種検定試験や通学費用に対する補助、奨学金（各学年10名程度）の支給、公営塾の設置、全国募集枠で集まった生徒に対して下宿費の補助、講演会などの実施といった手厚い支援が行われている。また、探究活動においても様々な形で協力がなされているようだ。

4 振り返りとして

飯野高校の探究活動に接し、肌で感じたのは生徒が探求を「ジブンゴト」として夢中で取り組んでいることと、楽しんで探究を進めている点が印象に残った。また、そこまで生徒を夢中にさせるためには、生徒が「やらされている」のではなく、「自分がやりたい」やっていると方向にもっていく必要があり、この点が探究活動の成否を左右するカギになりそうだ。

また、探究活動を進めている先生方も楽しみながら生徒を導いているように見える。生徒が目前でどんどん成長している姿を見るとやめられないと、飯野高校の先生が語っていたのが印象的であった。生徒が夢中になる以上に、教師が夢中になって探究活動をやらせているように見えた。探究活動を行わせている教師本人が生徒以上にエネルギーがあり、楽しんでいることがとにかく印象に残った。

## 関西方面視察

教諭 假野 聡  
 教諭 山内 未来  
 教諭 山本 和貴

### 1 はじめに

今回の訪問では、兵庫県立東灘高等学校（兵庫県）、兵庫県立舞子高等学校（兵庫県）、兵庫県立夢前高等学校（兵庫県）、兵庫県立川西明峰高等学校（兵庫県）に訪問し、「防災」「SDGs」「地域との協働」について各校の取り組みについて学んだ。

### 2 兵庫県立東灘高等学校

兵庫県立東灘高等学校は、人工島「深江浜町」に建てられた学校であり、1学年300人程度の規模である。東灘高等学校では「医療看護・保育類型」を設置しており、学校設定科目として「看護医療探究」が設定されていた。



東灘高校で行っている防災活動として、水平避難訓練があげられる。東灘高校は人工島に立地しており、本土に逃げるためには一つの大きな橋を渡るしかない。もし南海トラフ地震が起きれば、90分ほどで津波が島を襲うと言われている。そのため、南海トラフ地震のことを想定して、学校から橋を渡り30分以上ゆっくり歩いて安全な場所まで避難する避難訓練を実施している。また避難経路を考える際に、橋が崩落していないかを確認することを前提としたドローンを用いた防災活動を行っているという。ドローンを用いた防災活動は、10人弱の生徒が有志として行っているようだが、ドローンにかかる費用や管理の面で苦慮することが多く、ドローンを用いた防災教育を教育課程に位置付けて実施するにはまだまだ多くの課題があるという。

### 3 兵庫県立舞子高等学校

全国で最初の環境防災科を設置した学校である。この学科は2002年に設置され、3年間の準備期間を経て現在実際に動いている。準備期間の時には各教員が大学の授業に赴くなど知識を増やすことを行ない、3年間で生徒に教えられる知識がある状態で実際に科が動き始めた。しかし、一年で完成を目指さずに年々アップ

ロードさせ教員も一緒に考え、一緒に勉強しているとのことであった。評価方法については、防災科の授業では自己評価や相互評価、レポートやプレゼン発表などで評価しているようだ。

本校の現状を伝えてアドバイスをしてもらったところ、まずは「人づくり」「地域づくり」「絆づくり」を考えたらどうかと言われた。「人づくり」とは、「災害の時生き残れる人間になる（サバイバー）」と「災害被害者の支援者（サポーター）」を育成することを指し、災害のメカニズムの理解（理科）、情報を集めてデマを見極める（情報）、土囊の作成・エコノミークラス症候群の対策方法（体育）などを行う授業が実践できるのではないだろうかというアドバイスをいただいた。「地域づくり」とは町歩き等のフィールドワークを通じて地域の属性や社会背景などを調べて生徒が地域に提言することをさしている。地域の防災訓練への参加なども提案していただいた。「絆づくり」とは災害弱者になりやすい外国人に対して何が出来るか調べることを指し、やさしい日本語（国語）、海外の災害に対して離れたところから何が出来るか（英語）、スフィア基準（SDGs）など、教科横断で防災教育を実践していけばいいというアドバイスをいただいた。

また、「キャリアと防災をどう繋げるか」ということについて舞子高校では、キャリアを先に考えてから、そのキャリアについて防災を考えるようにしている。例えば保育士を目指す生徒には保育士になってから児童をどのように守るのか、建築関係を考える生徒には防災に強い町づくりはどのように作るのかなど、キャリアから防災を繋げていくことを考えさせていた。そうすることで生徒が防災を自分事として捉え、主体的に活動していくシステムが構築される。防災教育には正解はなく、教員が答えを出さないことが大事であり、生徒一人一人が考え答えを出してきたことが全部正解になっていくと考える。



#### 4 兵庫県立夢前高等学校

地域アクティブ類型（将来地域を支える人材の育成を目指す）が設置されており、地域に密着を目指し、将来夢前の町で地域を支える人材の育成などを目指す学校である。夢前高校では、学校に畑を作り（農業の専門家の方を招いて、農業のアドバイスをもらったり、月に一回来てもらい、畑を見てもらったりなど）、地域の幼稚園児に芋掘り体験などを行い地域との交流を行なっている。また、毎年三年生がチューリップを育てて小学校の卒業式に送るなど少しでも地域に密着出来る様なことを行っていた。他にも小学生とかるた大会や、キャリアステップの一環として3年生では、乳児の母親を講師として引き保育について学ぶ機会がある。夢前高校では、出来るだけ地域の方々に夢前高校の取組を知ってもらえるように夢高新聞（学校新聞）を地域に配布し、発表会等には地域の方々に来てもらえるように呼びかけを行っており、地域との協働に力を入れていた。



#### 5 兵庫県立川西明峰高等学校

兵庫県立川西明峰高等学校は、教育活動全てをSDGsの17の目標に照らして再編成し、現在、ユネスコスクールにチャレンジしている学校である。特色としてグローバルキャリア類型を設置しており、SDGsの学習の導入として「2030SDGs」カードが



ームを取り入れているようである。2学年から本格的にグローバルキャリア類型は始動するが1学期は自己理解や外に目を向ける授業の実施、2学期は探究とSDGsを絡めて自ら関心あることを掘り下げる探究活動を行っていき、3学年では個人での課題研究に取り組んでいくという流れができていた。しかし、そんな川西明峰高校も数年前は組織で動いておらず当該学年に属している学年団や、ある一定の人にものみ負担がかかる体制だったようである。教育活動を持続可能なものにするためには、それをファシリテートする組織が必要であり、組織で動くために、まずは年間の流れをきちんと作る必要があるとのアドバイスを頂いた。校内の掲示物のいたるところにSDGsマークを取り入れており、日ごろから生徒に自分たちの行動がSDGsの目標の何につながるかを意識付けしていた。研修体制に関しては、学校外に出かけての研修では時間が限られていて難しいので、学校に来てもらえる研修を行っていた。また、県からインスパイアハイスクールとして予算がついており、その主な使い道は生徒派遣費用や外部講師への謝礼、教員の旅費等とのことであった。



#### 6 学校訪問を終えて

今回の視察は防災とSDGsの取組を学ぶために行ったが、防災に関しては生徒に自分事として捉えられるような防災教育をする必要があると感じた。現在の避難訓練も、もっと現実に即したやり方でやれば、災害が起きた際に慌てず動くことができるだろうし、また、学校が避難場所に指定されているので、災害が起きた時に高校生や教員は避難場所でどのような動きをするべきなのかを事前に知っておくことが大事であると感じた。「もしも…」や「いざという時…」のことを想定した防災教育を行っていただければいいと思う。また、ドローンの活用に関しては、ドローンはあらゆる場面で使え、非常に便利なものである一方、金銭面や管理面で苦勞することが多いということが分かった。また、防災教

育でどのようにドローンを使うのか、なぜドローンを使う必要があるのか、をしっかりと考えなければ、ドローンを活用した防災教育が生徒の中で「ドローン操作は楽しい」で終わってしまうのではないかと危惧される。ドローンの所持に関する課題や活用方法の工夫などドローンを扱う際は考えなければならないことがたくさんある。

SDGsにおいては、SDGsの学習は『『未来探究』のこのコマで扱ったから良い』というのではなく、あらゆる事柄につなげて体系的に学ぶのが効果的であると感じた。「未来探究」の時間だけではなく各教科、行事、掲示物、生徒に配布するもの等でSDGsを扱うことで「自分たちの様々な行動がSDGsの目標につながっている」と意識させられ、生徒たちの思考の仕方も広がるのではないだろうか。また、探究活動を行っていく上で組織として、方針を決めて持続可能な授業をすることが必要である。(山内)

今回の視察では防災と地域との関わりを学ぶために行った。舞子高校では防災科があることで防災の授業や地域との取組がとても優れていた。阪神淡路大震災が過去にあったことで、いかにその震災を後世に伝えることや、減災についてなどをしっかりと授業の中で生徒に取り組みさせていた。なによりも、私が行った2校とも職員が一致団結しており、しっかりと生徒の為に何が出来るのか、生徒の将来を考え、今必要なことなどをしっかりと考えていたことに驚きを感じられた。しかし、始めは苦難続きの連続で、縦割りの中で職員が動いていたなど、本校と変わらない現状であったが、初動期に関しては横断の考えを持たないといけないことが大事だと気づき、誰か任せではなく、自分に何が出来るのか、何が必要かなど考えることに思考の変化が芽生え始め今があるとのことであった。初めのうちは上手くいかないことの方が多いがやる気のある人間で動いて他を巻き込むように動いていかなければ、いつまでも前に進まない。誰かを変えるには大変な労力を使うので、自然と変わるように動ける人が最初はどんどん動いていくべきだ、とのことである。その話を聞いたときに確かにそうだなと思った。まずは現状に嘆く暇があったら今の自分に何が出来るか考え、アイデアをまずはしっかりと形にしていきたいと考えられるようになった。私は正直、舞子高校で働きたいと思った。だから職員が山北高校で生徒を教えたいと思えるような学校にしていきたいと思う。その為に生徒にもワク

ワクがとまらないような授業や、魅力ある学校をこれからも考えて形にできるよう努力をしていきたい。(假野)

今回は防災やSDGs、地域との協働の取組を学び、先進校との情報共有をして本校の現状を伝えアドバイスをいただくことを目的に視察に行ってきた。見学したどの学校も、指定された事業を学校全体で、そしてあらゆる場面で取り組んでいた。例えば舞子高校では防災科の取り組みを様々な教科に関連させたり、キャリア教育にも結び付けたりしており、防災を軸に学校運営をしていた。また、川西明峰高校では、SDGsを意識しユネスコスクール加盟を目指すという取り組みを学校全体で取り組んでいた。このように本校でも、探究の時間を当該学年だけで取り組むのではなく、すべての教員があらゆる場面でSDGs及び地域との協働の指定に関わる必要があると改めて感じた。本校の現状では、SDGsを推進する側の我々が持続可能になっていないと考えられる。視察に行った両校でいただいたアドバイスはいずれも、教員同士の連携が不可欠ということ、生徒にはまず初めに知識をきちんと与えること、そのためには教員が知識を得る必要があり、準備期間のうちに勉強会や視察等を行うということであった。どの学校でも新しい取り組みの初動期は苦難が多い。それでも、生徒のために、学校のために何が出来るかを考えながら諦めずに取り組みたい。(山本)

## 浜松学芸中学校・高等学校

総括教諭 野秋 貴浩

### 1 はじめに

今回の訪問は、「地域協働・探究学習意見交換会」と題し、地域協働に関わる探究学習を行っている近隣5校が集まり、参加校間の情報や問題の共有と意見交換、また、浜松学芸高校の活動視察を目的に行われた。参加校は、本校以外では浜松学芸高等学校（静岡県）、桜丘高等学校（愛知県）、常葉橘高等学校（静岡県）、県立紀南高等学校（三重県）であった。



### 2 浜松学芸高等学校の取組について

現在、浜松学芸高等学校の探究学習の取組は、社会科学地域調査班（26名）が中心となって行っている。来年度より、これまでの地域調査班の取組を元に、地域創造コース（40名）を設置する。

地域調査班の活動では、観光甲子園等のコンクールへの応募や地域の特産品を活かした商品開発など企業と連携し行われている。



学習のキーコンテンツとして1年生では企業から与えられたプロジェクトの取組が主となる「プロジェクト学習」、2年生以降は企業提案を主とした「クエストエデュケーション」が行われており、企業と連携し実践力とともに課題解決力の育成に力を入れている。

また、「地域の魅力の見える化」、「人をつなぐ化」、「理念を伴ったブランドの確立」をテーマとして学習を行っている。

現在では多くの取組が認められ、天浜線のポスター作製や県立森林公園のCM受注、摘果みかんの販路拡大など活動は多岐に渡っており、盆踊りイベントの企画など「モノづくりからコトづくり」へと活動は変化している。



### 3 各校の情報共有と意見交換

#### (1) 学校設定科目の評価について

5段階評価、ABC評価、文章評価など各高校で異なるが、すべての学校で評価を行っている。しかし、意見の中には評価をすべきなのか？といった意見もあった。

#### (2) 浜松学芸高等学校の地域創造コースのカリキュラムについて

現在の地域調査班の取組を、地域創造コースのカリキュラムとしていく予定だが、40名が限度である。学校設定科目の「地域創造」が週5単位の予定で、フィールドワーク等積極的に行えるカリキュラム編成となっている。

#### (3) 3学年を見越した探究学習について

現在は単年度で実施している探究学習だが、今後、3年間を見越しどのように展開していくか、多くの学校で課題として挙げられた。



浜松学芸高校では、1年生はクラス単位で活動を行い、2、3年生ではクラス単位での活動は行わない計画である。1年生で探究学習に必要なことを徹底的に学習し、2年生、3年生では3年生がプロジェクトリーダーとしてタテ割りのユニットとして活動する計画である。

良い伝統を先輩が後輩へ引き継いでいくことで、持続可能な活動と変化していく。

#### 4 振り返りとして

多くの学校で試行錯誤の中、様々な学習が展開されおり、情報や課題を共有することにより自分自身のエネルギーとなった。「教師が楽しくなければ生徒は楽しくない」「住んでいる人のQOLを上げれば観光は自然と上がる」など、目標となる言葉もあり、今後の探究学習の一助となる時間となった。今回の意見交換会を企画してくれた浜松学芸高等学校に感謝したい。



## 1 はじめに

今回の訪問では、『文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」1年次研究成果発表会』と題し、上天草高等学校の地域協働に関わる活動についての発表を見た。熊本県内外の高等学校14校の他、小学校、中学校、大学、様々な企業が集まった。参加校は、本校以外では三崎高等学校（愛媛県）、大口高等学校（鹿児島県）、熊本高等学校（熊本県）、熊本西高等学校（熊本県）、湧心館高等学校（熊本県）、菊池高等学校（熊本県）、菊池農業高等学校（熊本県）、鹿本商工高等学校（熊本県）、矢部高等学校（熊本県）、小国高等学校（熊本県）、八代工業高等学校（熊本県）、御船高等学校（熊本県）、天草工業高等学校（熊本県）であった。その他、熊本大学や東海大学の教授、熊本県教育庁などの参加もあった。

## 2 上天草高等学校の探究への取組について

上天草高等学校は、平成30年度より「スーパーグローバルハイスクール指定校」を受けて地域との協働に取り組んできた。また今年度より、本校と同じ文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受けた。カリキュラム開発等専門家に上天草市松島町教員木で「地域おこし協力隊」として活動中の元田有祈さんのサポートを受けて探究活動を進めている。

1年生では、探究活動を「上天草プロジェクトⅠ」と称し「聞く」「話す」「表現する」をテーマに授業を展開している。地域の現状を理解し、その中から課題を発見し、分析する力、克服して解決に導く力を養う授業を行っている。「人に感謝される稼ぎ方」を主軸にテーマを設定し、「高校生ビジネスプラン・グランプリ」に応募していた。また成果をまとめて、3月の発表会でスライドを用いて「ビジネスプラン」について発表を行った。

2年生では、1年で行った「上天草プロジェクトⅠ」を発展した「上天草プロジェクトⅡ」の他に普通科の生徒には「地域起業研究」と称し上天草企業の事例研究、商品開発の理論と実践、マーケティング理論講座を設定し、地域現状の課題に対して論理的思考によって解決の糸口を導き出す力を養う授業を想定している。また2年次でもビジネスプランを考え、11月に中間発表をして2月に研究成果発表会を行う。

3年生では、普通科で「地域イノベーション研究」と

題して観光ビジネス講座やビジネスマネジメント講座、グローバル経済講座等を中心に取り組む。既存産業を従来にない枠組みで結びつけたり、地域資源を生かした新事業の立ち上げや技術革新を行うなど、地域の課題を打破するために柔軟な発想で変格をもたらす力を身に付け、論理的思考によって解決の糸口を導き出す力を養う。

また、中高一貫の起業家教育を通して、中学校と連携し生徒を「エキスパート生徒」として中学校の授業に参加させ、起業家教育における課題研究についてアドバイスをを行う。

## 3 探究活動の評価開発の取り組みについて

探究の授業において生徒を評価するために、「ルーブリック評価」を行っている。生徒に身に付けてほしい力として「聞く」「話す」「表現する」を基本・応用・発展として段階的に評価している。

## 4 研究発表を通して

各班が上天草の特色を生かしたビジネスプランを展開していた。例えば市内の課題として、「猪による作物被害」があり、その解決策として「天草ジビエプロジェクト」と題して「牡丹鍋」を提供するビジネスプランを収支計画と共に作成していた。また、使わない学校などの建物が多く存在するため、「廃校サバイバル」と題して、「サバイバルゲーム」を展開する事業案を出すなど課題を明確に理解し、ビジネスにつなげようとするものばかりであった。収支計画はまだ改良の余地があるものが多かったが、非常に将来性に溢れる自由な発想が地域の魅力を引き出していた。

## 5 振り返りとして

上天草高校は非常に都市部から離れた場所にあり、過疎化している地域で、生徒が小・中・高とほとんどメンバーが変わらない中で生活しており、協同で取り組むことに慣れているような雰囲気があった。また外部からの講演会も多く、地域を知る機会も多くあったため、地域理解に基づいた探究活動ができているように感じた。天草という町の背景や特色が山北町とは違う部分があるため、山北町の魅力を発信することが重要になってくると感じている。そのために地域理解をし、到達点を定め、今後も取り組んで行く必要がある。

## 1 はじめに

愛知県立海翔高等学校は普通科と福祉科を併置した県立高校であり、普通科の課程には普通コース、スポーツコース、環境防災コースが設置されている。海翔高校は海拔0メートル地点に位置しているだけでなく、近隣には大きな川が複数流れており、台風や大雨による浸水や地震による津波などの被害を受ける可能性が高い環境である。普通科の枠の中で「防災」をテーマにした様々な教育活動を行っており、本校の「地域防災」の授業や指導の参考となると思い訪問した。

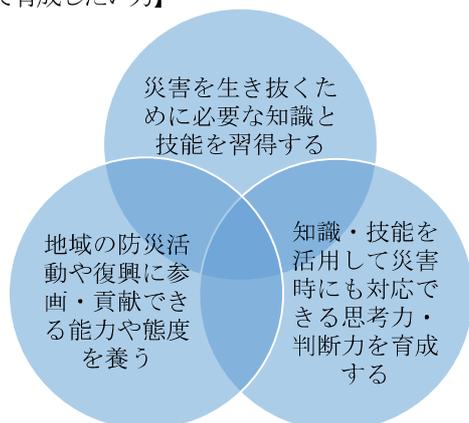
## 2 海翔高等学校の探究への取組について

海翔高校の環境防災コースでは3年間で14単位の環境と防災に関する授業が用意されている。校外での実習が多く実施されるため、ほとんどの授業がT.Tで行われている。コースでの学びは【学ぶ】【体験する】【伝える】のサイクルを意識したもので、生徒が「正解のない答え」を導き出す力(=生きる力)の育成を目指している。また、環境防災の知識や技能を身に付けるだけでなく、それらの知識や技能を活用して災害時や地域の防災活動に貢献できる人材の育成を目指している。

地域の小学校での実習活動の機会も豊富にあり、高校入学後すぐの5月には、避難訓練の補助を行う。1年の後半では小学生と防災かるたで遊んだり、小学生向けに防災クイズを実施したりしている。また近隣の大学や地域のNPOから講師を招いて地震や災害、防災に関する出前授業を受けることができる。

避難所では高齢者や障がいを持った人など社会的弱者を受け入れることがある。そのような状況でも対応できる力を育むため、手話の勉強や認知症についての理解を深める授業も用意されている。

### 【防災教育で育成したい力】



## 3 探究活動の評価開発の取組について

生徒の成績は座学と実習の取組状況を1:1の割合で評価している。授業では市販の書籍と教員作成のプリントを主な教材にしており、筆記試験は学期末考査のみ実施される。実習については、それぞれの活動をA、B、Cで評価している。

## 4 各校の情報共有と意見交換

海翔高校が位置する弥富市は1959年の伊勢湾台風で甚大な被害を受けており、地域全体での防災意識は高い。そのような環境であるからこそ、環境防災について学ぶことができる学校へのニーズも高いと思われる。そのような地域性もあり、地域の方々からの学校活動に対する理解を得やすく、その協力は不可欠である。

環境防災コースの主な学習活動として、近隣の小学校での出前授業が複数回実施されている。小学校での授業では海翔高校の生徒も責任感を持って学習や準備に取り組むようである。また地域と協働した活動やイベントも年間を通じて実施されており、生徒と地域住民との交流の場となっている。

弥富市には「愛知県西部防災ボランティアコーディネーターネットワークの会」というNPO団体があり、地域の防災活動に貢献している。海翔高校ではその団体から講師を派遣してもらい、「防災ボランティアコーディネーター体験講座」を環境防災コースの生徒全員が受講する。学校だけでは活動の内容が限定的なものになりがちなので、地域の資源を大いに活用していくよう助言をいただいた。

さらに、「アクサユネスコ減災防災プログラム」を紹介された。海翔高校はこのプログラムに参加して、全国に防災教育の仲間ができ、生徒にとってもよい刺激になったそうだ。

## 5 振り返りとして

海翔高校は本校と同じ県立高校であり、環境防災コースの学習活動に使える費用は決して高くはない。しかし、地域の支援や近隣の小・中学校との交流が盛んなこともあり、様々な活動が実施できているのだと思う。地域のニーズに応じた学習活動を企画・運営しているからこそ、地域と良好な関係を築けたのだと思う。

## 1 はじめに

名古屋市立名東高等学校は普通科と国際英語科が併置された市立高校であり、昭和59年の開校時から国際理解教育や国際的視野に立つ人間の育成を推進している。また平成26年にはユネスコスクールに認定され、ESD教育を学校全体で取り組んでいる。特に国際英語科には学校設定教科「ワールドスタディーズ」が設置されており、本校のSDGs教育の参考になると思い、訪問した。

## 2 名東高等学校の探究への取組について

名東高校ではESDの視点に立った様々な教育活動を用意し、「名東版ESD」と名付けて学校全体で取り組んでいる。名東高校は国際社会に貢献できる人材の育成に力を入れており、身近な社会的問題のみについて学ぶのではなく、世界の諸問題にも目を向けて学習に励んでいる。

### 【名東版ESDで育む力】

- (1) 社会の一員として、アンテナを高く張り、問題意識を持って思考する力
- (2) 探究する力
- (3) 他者に伝える力
- (4) 他者と協力して問題解決する力

国際英語科の「ワールドスタディーズ」の授業では、世界の課題について学び、自分の課題を見つけ、解決方法を考えることに取り組んでいる。1年生では主に世界の諸問題について「知る・学ぶ」授業を展開している。2年生ではそれらの学習で得た知識や技能を基にして、世界の諸問題の解決に向けて自分たちにできることを模索し、「発信・行動」する授業を展開している。また修学旅行では韓国の高校を訪問し、現地の高校生と共に世界の諸問題について考える。2年生の3学期にはこれまでの学びを総括し、ESDをテーマにプレゼンテーションで課題と解決策を発信する。

今年度(令和元年度)の2年生のワールドスタディーズの授業では、「SDGs未来都市名古屋への提言」をテーマにした活動に取り組んだ。11月から地域研究を行い、そこから地域の課題を見つけ、2月にはその解決に向

けた行動提案をプレゼンテーションで発表する。プレゼンテーションは教員と生徒により評価され、優れた提案は名古屋市に向けて実際に提案することができる。

### 【提案例(一部)】

- 観光客が来てくれる名古屋の街づくり
- 貧困をなくそう
- 住みやすい街づくり
- 国境を越えてつながる街～水とともに～
- 外国人にやさしい街づくり

## 3 探究活動の評価開発の取り組みについて

生徒の活動は主にワークショップの成果物やプレゼンテーションの出来、授業中の取組みに基づいて総合的に評価している。前述の名古屋市への提言については、SDGsの視点から課題を考察し、解決策を提案できているかが特に重点的に評価されている。

### 【評価規準】「SDGs未来都市名古屋への提言」

#### 観点① 内容

- 取り組んでいる内容がSDGsの観点に合致したものであるといえるか
- 名古屋市に関する現状の問題の分析がなされていたか
- 提言がわかりやすく適切なものであったか

#### 観点② プレゼンテーション用資料

- 提示された資料(スライド)は分かりやすく、内容理解を助けるものであったか

#### 観点③ 話し方

- 声の大きさ、話すスピードは適切であったか

## 4 振り返りとして

名東高校はユネスコスクールの理念を踏まえた学習活動を学校全体で実施しており、特に国際英語科の授業の取組は非常に参考になった。また名古屋市がSDGs未来都市に選定されていることも、名東高校のSDGs教育の推進につながっていると思った。神奈川県もSDGs未来都市に選定されており、その推進に向けた意識が高い自治体である。県西部地区だけでなく神奈川県の地域資源を生かした教育活動を企画できれば、より充実したSDGs教育を展開できるだろう。

## 茨城県立並木中等教育学校

教諭 露木 幸子

### 1 はじめに

訪問先の茨城県立並木中等教育学校は、生徒たちが「夢」を実現できる教育を提供するとともに、日本の未来や世界の未来を支えるような「大きな夢」を語れる若者の育成を目指している。また、その先進的な取組を全国に発信することにより、「日本の教育の未来」に貢献し、全国から注目される存在となっている。



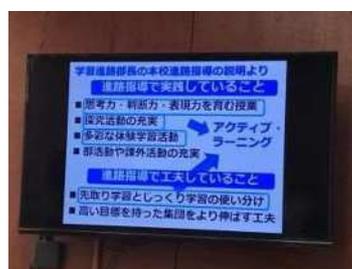
### 2 学校の概要



茨城県立並木中等教育学校は前身の並木高等学校から発展し、2008年4月に開校した。「Be a top learner」を校是に掲げ、「人間教育」「科学教育」「国際教育」を柱とした6年間の中高一貫教育を行っている。近年では、卒業生の半数が現役で国公立大学に合格し、医学部医学科への進学や海外留学等、6年間で身に付けた「真の学力」により、幅広い進路実績をあげている。また、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校として、科学教育を積極的に推進している。さらに、新学習指導要領についても研究を進め、後期課程（高校）で、「論理国語」等を開設し、先行実施を行っている。現在、2015年度から授業に取り入れた「アクティブ・ラーニング」をはじめ、SDGsに関連した「探究活動」、「英語の4技能習得」、「ICT教育」など、多方面で教育活動を展開し、その過程で身に付けられた課題解決能力が「並木スタンダード」の成果と評価されている。

### 3 アクティブ・ラーニングについて

並木中等の「アクティブ・ラーナー」は、6年間かけて育成される。1・2年次を基礎期、3・4年次を充実期、5・6年次を発展期と位置付け、「科学教



育」、「国際教育」、「人間教育」が6年間を見通したプログラムにおいて行われる。これらの3本柱の中で、特に「人間教育」は生徒を「アクティブ・ラーナー」へと成長させる要の取組である。人間教育では、1年次からプレゼンテーションに取り組むことにより、「思考・判断・表現力」を育成している。探究活動等の発表の場だけではなく、日常の授業においても予習や前時の学習に基づいたプレゼンテーションがグループごとに行われ、話し合い活動へと生かされる。最先端のICTと「アクティブ・ラーニング」が見事に調和した授業への日々の取組が「人間力」を備えたグローバルリーダーの素地となっている。また、上級生の偉業を手本に、6年間を通して鍛えられたプレゼンテーション力の高さは様々な場面で評価され、これらの能力を備えた「アクティブ・ラーナー」としての成長の証となっている。そして、その成長が進路における自己実現に反映されている。東大を始め数々の難関校への挑戦に臆することなく臨む姿勢は、学びや探究を楽しむ「アクティブ・ラーニング」により培われてきた。並木中等教育学校では、主体的、対話的で深い学びと定義される「アクティブ・ラーニング」が見事に具現化され、その教育効果が進路実績により証明されている。

#### 4 振り返り

授業に取り組む生徒たちの目の輝きに感動した。主体的、対話的に学習に従事している姿から、学びを楽しんでいると感じられた。彼らは学び合う過程で様々な発見や閃き、そして試験にも出会うのだと考える。彼らの学びのイメージを本校の「未来探究」の取組に重ね、生徒たちが、探究を楽しみながら協同的に活動する中で、総合的な人間力が高まるよう支援したい。

